

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 美葉

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0372700716		
法人名	有限会社チバコウ		
事業所名	グループホーム 美葉		
所在地	〒029-0803 一関市千厩町千厩字岩間38-4		
自己評価作成日	令和5年9月29日	評価結果市町村受理日	令和5年12月8日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<p>・コロナ感染予防対策等の影響で本来力を入れて支援していた散歩やドライブ、地域行事見学などを通し、外へ出る機会を多く取り入れた支援が難しい状態であったが、5月以降徐々に回復傾向にあり以前の支援に戻りつつある。</p>
--

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/03/index.php?action_kouhyou
----------	---

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>中山間地域の中にある2ユニットの事業所で、広い敷地内には畑もあって多くの利用者は畑作業を楽しむなど、恵まれた環境に立地している。特に地域との連携や交流を大切にして運営を続けてきており、事業所の広報誌を町内会の皆さんに配布して、認知症に関する情報を提供するなどの努力を重ねている。このため、運営推進会議には近所の住民の参加もみられたり、毎日、犬の散歩で立ち寄り方がいてセラピー効果もみられるなどの成果を挙げている。また、外出支援にも努力しており、毎日のようにミニドライブに出かけたり、食事でも野外でのBBQを楽しむなど、職員は利用者の心身のリフレッシュを目指して支援に努めている。</p>
--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 いわたの保健福祉支援研究会
所在地	〒020-0871 岩手県盛岡市中ノ橋通2丁目4番16号
訪問調査日	令和5年10月18日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	職員が支援対策に迷った場合は運営理念に戻ること 基本とすることで対策を発見することもある。廊下に掲示することで確認し易い。	開設当初からの理念を大切にしており、支援のうえで迷うような時には理念に立ち返り考えるよう話し合っている。理念には「健やか」、「穏やか」等が明記され、全てに手を掛けて上げるのではなく、自立に向け“出来る事は自分で”を意識し、残存能力を生かしながら、職員は利用者のペースでゆったりと過ごせるよう支援を行っている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域の方が花や野菜を届けてくれることもある。また散歩の途中で立ち寄り、入居者との会話もある。今年度から運営推進会議も再開しており、地域住民の参加も得られている。	事業所の広報誌を地域の各家庭にも配布し、認知症に関する情報発信も行い、地域からの理解が得られてきている。コロナ禍で交流行事を休止していたが、今年の敬老会では久しぶりに地元の八幡太鼓が来訪して園庭で披露してくれた。近所の方が毎日の犬の散歩で来訪し、利用者も犬との触れ合いを楽しんでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎月発行のホーム広報を地域にも配布。広報の内容に「ちょこっと介護コラム」のコーナーがあり、グループホーム、認知症、介護申請などの情報を載せている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	参加者に市職員、自治会長、振興会長、民生委員、地域住民、家族の参加があり、各方面からの情報や要望等を聴く機会にもなっている。	運営推進会議の委員には、地元町内会長や民生委員、行政職員の他、希望する近所の住民が加わりバランス良い構成となっている。5月から漸く集合開催となっており、活発な意見交換がなされている。9月には初めて家族の参加もあり、今後いろいろな方法を考えながら、家族参加の方法を試みて行くとしている。	会議への家族の参加が一つの課題としているが、例えば行事に併せて開催するなどして案内すれば参加し易いと思われる。他にも検討の上、貴重な家族意見をいただけるよう期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	待機者数の問い合わせや場合に寄っては申し込みもある。運営推進会議ではホームの活動報告や予定を伝えている。災害予報時には、その前後に注意と安全確認の連絡がある。	運営推進会議には市役所支所の職員が参加しており、助言や指導を受けやすい。介護認定の更新の際には、千厩支所や藤沢町地域包括支援センター等と連携している。生活保護受給者については、担当ケースワーカーが定期的に来訪し面会している。	

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 美葉

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束適正化検討委員会を3ヶ月に1回開催。(現在は未実施)その中に拘束廃止に関するスタッフ全体への研修があり、毎回内容を変えて例や拘束をしない工夫などについて研修している。玄関の施錠に関しては、入居者の身体に危険が予想される以外は施錠の必要がない。	管理者や各ユニットリーダー等で構成される身体拘束適正化委員会において、身体拘束の内容や弊害を理解したうえで、適切なケアをするための研修を行うものとしている(3か月に1回開催することとしている)。大きすぎる声などのスピーチロックが見られた場合には適時に注意し指導している。離床センサーは2名が使用しており、家族には説明し了解を得ている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	虐待の種類や例について研修し、暴力行為だけが虐待では無いことを理解している。また、安易な身体拘束も虐待に直結することを周知している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	本年度、初めての成年後見制度を利用するケースがあり、更に2名の方も後見人が決まった。今まで無かったケースであり、今後の勉強の機会となった。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に個人情報同意書、重要事項説明書、契約書の順番で説明、押印を頂いている。入居料や介護報酬改定時には文章で説明を行い同意を得て入居の継続が行っている。(少額改定の場合は同意書までは頂いていない)		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に記入用紙とご意見箱を設置している。毎月発行のホーム広報にも意見、要望、助言などを随時受付ける姿勢で取り組んでいることを記載している。	家族からの意見等は、毎月の広報誌発送の際や、通院同行時で来所の時に伺うよう努めている。来所しても利用者とは会わずに帰る家族もいて、職員が要望等を伺う難しさがある。利用者からは運営に関する意見というより、食べたいものや出かけたい等の希望が多く出されている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフ会議やカンファレンスの際、ケアに対する意見や対策を聞く機会があり、実践に繋げることが多くある。	職員からは毎月のスタッフ会議やカンファレンス会議などにおいて、ケアの内容等に関して様々な意見が出されている。意見を通して、歩行でき落着かない利用者の専門医受診に繋げたり、事務の簡素化のためタブレットを使用するなどの改善が図られている。	

事業所名 : グループホーム 美葉

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	自分の勤務条件の時間帯や日数で採用している職員もいる。給与水準に関しては介護報酬が上がらない限り事業者の努力だけでは限界がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	介護業界の人員不足、コロナ禍により内部の研修も少なくなっている。また、入居者の重度化による身体介護負担増の為、研修時間が取れない状態も事実である。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	以前は実施していたが、お互いコロナ感染を警戒し現在は実施不可能な状態である。		
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居前に生活の場(自宅、施設など)を訪問し面談を実施するなかで情報を収集。また、担当のケアマネからも情報を提供して頂くことで、可能な限り現在の生活と変わらない日常を送って頂くことを心掛けている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居申込の時点で家族の困っていることや不安を聞き取りする。共同生活住居の為、全ての要望に応えられる訳ではないが、初回のケアプラン作成時に本人の要望家族の要望を取り入れ計画作成をしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	支援対策は一人ひとりに違いがある。その人に必要な支援を見極め提供する。共同生活の継続が困難な場合は他の施設利用や医療機関を紹介する支援も行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の好きなこと、嫌いなこと、安心すること、不穏になるパターンを把握して支援。また、本人のできる軽作業を無理なく行うことで役割や責任と捉え、本人の自信に繋げている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の理解や協力が無ければ困難な支援も多くある。コロナ禍、遠方などにより本人に中々会う機会が取れない家族も多くなっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会制限中であり、頻度や時間、場所にも制限がある。それでも在宅時に利用していた床屋さんが見え、利用者の居室で話をしたり、在宅前からの理容院へ送迎をしてもらいながら散髪に出かける方もいる。毎日犬の散歩で事業所を訪れ、利用者とのコミュニケーションを図るだけでなく、犬もアニマルセラピーになっていて、事業所では、関係継続の支援に努めている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	折り合いの悪い入居者もいる。以前にトラブルが発生した状況を共有することで事前に回避できる。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	契約解除後の訪問、連絡や相談は無い。		

Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント

23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	共同生活の場であることを理解し、強い要望を求めない入居者もいる。危険のリスクは伴うが自己決定も尊重し、可能な範囲での見守りや付き添いを実施。	思いや意向を言葉で表現できる方は全体で10名ほどいる。希望の多くは食べたいものや外出などであり、希望に沿ってなるべく対応することとしている。話ができない方には職員が話しかけたりして把握に努めている。特に畑作業に取り組む利用者が多く、暑さが厳しい今夏でも熱心に作業されていた。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に生活の場(自宅、施設など)を訪問し面談を実施するなかで情報を収集。また、家族、担当のケアマネからも情報を提供して頂くことで、可能な限り現在の生活と変わらない日常を送って頂くことを心掛けている。		

令和 5 年度

2 自己評価および外部評価結果

事業所名 : グループホーム 美葉

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	本人の出来ること好むことを継続できるように支援。本人が不安になる時間、理由を把握することで不穏時間前に意識を変える。このことで不安な時間帯が長期化しないようにしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的な計画書の見直しの他、言動の変化や身体的レベルの低下、入院があった場合に見直しを実施。カンファレンスに参加できない職員からは事前に情報や意見を収集。担当者は情報を元に計画を作成。介護計画書に沿った支援の提供を心掛けている。	入居時には計画作成担当者が原案を作成し、1ヵ月経過後に見直しを行い、全職員参加のカンファレンスを経て正式決定している。計画の見直しは3ヵ月ごととしており、居室担当制にはしていないため、モニタリング評価は全職員が参加して行っている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	記録の記入も職員の大きな負担となっていた。現在はタブレットでバイタルや服薬、食事水分摂取、入浴、排泄、特記事項などを入力している。その他、職員間の情報共有として連絡ノートを準備、共有事項を記載し出勤時と退勤時に確認することで共有できている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々にも生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	屋内で過ごす時間が多くなり過ぎないように、ドライブの機会を増やし屋外へ出掛ける機会を多く提供している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	町内や隣町で開かれるイベントや行事見学に出掛けている。7月は恒例の昼食会を実施。好きな物を注文して食べる機会としている。(現在はコロナ禍によりホームでバーベキューを実施)		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	半数の方が訪問診療を受けている。医師に情報を提供することで服薬の相談や支援のアドバイスを頂ける。	昨年までは隣町の藤沢病院からの訪問診療を受けていたが、今年からは地元のなのはなクリニックの訪問診療を利用している。他の通院は藤沢病院や地域の個人医院を受診している。看護師がいないため、クリニックに電話して指示を仰ぐこともある。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護師の配置はない。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	入院の際は情報提供をし、経過についても病院から連絡がある。以前は退院前に病院側とのカンファレンスもあったが、コロナ禍の影響で服薬の説明程度となった。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	看取り加算を申請していないため終末期に向けた方針はない。重度化し、共同生活の継続が困難な場合でも介助により食事や水分摂取が可能な限り支援は続ける方向である。勿論、次の段階の施設利用を希望する場合は相談、支援は行う。	入居時に重度化した場合の対応や看取りは行っていないことを説明し理解を得ている。重度化してもギリギリまでは介護支援を行っているが、対応が困難になった場合には、特養や老健施設に変更になったり入院する例が多い。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時、事故発生時の対応マニュアルに沿って対応。初期の対応が大事なことは職員に説明している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	水浸地域とはなっていないが、避難場所を第1、第2と決めている。また、避難経路に危険が予想される場合はホームに留まることも指示している。運営推進会議の中で地域住民の協力時の役割について振興会会長と確認済みである。	ハザードマップでは浸水や土砂災害の危険地域とはなっていない。避難場所として地元高校が指定されているが、当地より低地にあるため、あまり現実的ではないと考えている。火災想定避難訓練は行っており、今年も2回目の訓練は夜間想定を検討している。	夜間想定避難訓練を行う際には、薄暮時の暗くなる時間に行い、地域の協力者にも参加してもらうなどして、実践的な訓練となるよう期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	例え認知症を患ったとしても大変な時代を生きる人生の大先輩方であると心得支援している。個人個人の言動を否定しない対応や声掛けを意識している。特に排泄の失敗は他入居者に気付かれないように処理をしている。	職員は利用者に対する声掛けや言葉遣いに気を配り、各利用者の言動を否定しない対応を心掛けている。特に排泄の失敗の際には、他の利用者から気づかれないよう配慮してケアしている。利用者への話しかけは「さん」づけで行うこととしている。	

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 美葉

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	食事メニューの希望やドライブの行き先、屋外で過ごしたい時、畑仕事など危険が伴わない範囲で行動ができるよう自由とし、見守りや付き添いを強化することで対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務を優先させなければならない状況も多々ある。事故のリスクもあるが入居者の自由を基本に支援。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	基本的には家族が準備した衣類の着用となる。本人が好まない衣類や危険が伴う衣類(ボタンの異食)は着用を勧めることはしない。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	毎食のメニューを入居者から見えるところに掲示している。時には入居者の希望でメニューが決まることもある。おしぼりたたみ、下膳、食器拭きなど、出来ることを手伝って頂いている。	献立と調理は職員が行っており、利用者の好みによる献立とすることもある。畑作業でできた野菜も食材として活用している。7月にはバーベキューで食事を提供し、利用者は楽しまれている。秋には干し柿づくりにも利用者は熱心に取り組み、年間を通して食材となっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事制限の掛かる入居者はいない。食事、水分の摂取量を毎食毎にタブレット入力することで記録管理し体調不良等の目安に役立てている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔ケアに関しては、ほぼ全ての入居者に声掛けが必要である。また、洗浄に関しては職員の支援で行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	ポータブルトイレの設置者は一人もいない。トイレでの排泄を基本としている。個人個人24時間、1時間ごとの排泄チェック票を準備し排泄パターンを把握することでトイレ誘導。失禁軽減対策、便秘のコントロールに役立てている。	排泄チェック表により排泄パターンを把握し、自力でのトイレ排泄を基本としている。これにより排泄の失敗や便秘のコントロールに役立てている。オムツ使用はなく、布パンツで自立の方は5人位で他はリハビリパンツを使用している。入居前にポータブルトイレを使用していた方が現在は使用しておらず、改善に努めている。	

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 美葉

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	多量の服薬や運動不足による便秘はある。繊維質の食物の提供、水分調整、運動により緩和個人に合わせた便秘薬の服用タイミングをコントロールし対応している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそうした支援をしている	安全を最優先し、職員配置の一番多い時間帯に実施している。入居者の希望通りとはなっていないが、そのことによる不満は聞かれていない。入浴拒否の日もあるが、無理に勧めることはなく、後日のタイミングで入浴して頂いている。	週2、3回の入浴となっている。拒否傾向の方には無理強いせずに、翌日にしたり、時間をずらして声掛けしたりして対応している。異性介助を拒否する方はいない。職員と1対1となる入浴時間は、昔話などで会話が弾む方も多く、良いコミュニケーションの機会となっている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	昼寝の習慣の有無。就寝時間の違いを把握し、声掛けや誘導で就寝介助を行っている。レクリエーションの時間に居室で休まれていても参加を強要することはなく自由としている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	服薬説明書を預かっている。効能や効果、注意事項が記載されているので把握できる。副作用の症状が表れた場合は家族や医師、薬剤師に情報提供し指示を受ける。時には服薬の中止、変更もある。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人が出来る軽作業、出来ない事、好む事、嫌う事を把握することで穏やかに生活して頂く。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ホームでは屋外活動に力を入れている。地域の人々の協力で出掛けることはない。家族の支援としては通院後の帰宅や食事がある。	事業所の近隣には外出支援に適したドライブ先も多く、3、4人位のミニドライブで良く出かけている。室根山のツツジや藤沢のひまわり畑、川崎のアジサイ園、町内のお花見などを楽しんでいる。また、近所の散歩や畑作業も良い外出機会となっている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人が直接支払いをする機会はない。所持していない不安を職員は理解しており、安心出来る声掛けを実施している。ホームでは本人持ち金として1万円位を預かり日常品の購入や床屋代、訪問診療料金などに支払いをしている。		

令和 5 年度

事業所名 : グループホーム 美葉

2 自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の要望は帰宅願望に関する内容の為、家族の都合を考えると希望通りにならないケースが多い。最近では手紙が届く入居者もない為、返事を書くこともなくなっている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホールと台所が対面式となっており、調理の音や匂いを感じ取れる。入居者が手伝う場合もスムーズに移動ができる。また、調理をしながらでも入居者の見守りが出来るため事故防止にも繋がる。廊下には歩行の妨害になるような物は置かないこととしている。	ホールには、季節感あるハロウインの飾り付けがなされ、壁には折紙のモミジの貼り絵が飾られている。廊下にはミニドライブや誕生会などの写真も掲示されている。ホールと台所が対面となっていて、調理の様子や匂いが感じとることができ、利用者も下膳等の手伝いがスムーズにできるようになっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	畳敷きの小上りがあり、自由に使用できる。廊下の端に椅子を備えており、一人で過ごせるスペースを確保。屋外にも椅子やベンチを配置することで、散歩後も日光浴ができる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前のベッドやタンスの位置を確認し、出来るだけ変わらない入り口からの位置や方向を整えることで環境を変えないようにしている。居室に収まる範囲で好みの物や趣味の物を持ち込み可能としている。	居室の入口には、木枠で作った表札が飾られ、自分の部屋がわかるようになっている。居室には、ベッドと整理ダンス、パネルヒーターが備え付けられており、利用者は自分の塗り絵作品や行事での写真などを飾って、居心地よい空間となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレや自室の認識が出来ない方もおられる。判り易い表示や、居室入り口に名前を表示することで自分の部屋、他の方の部屋であることを確認できるようにしている。		